環境によるある一人の進化

泉中学校　二年　伊勢　智絵

私は、人が苦手だった。コミュニケーションを取らなければならないし、緊張はするし。大きな宇宙でほんの小さな人間同士が関わらなければいけないのは、不思議で仕方なかった。それくらいなら別にコミュニケーションを取らないで少し嫌われてもいい、とも思っていた。「コミュニケーションを取るだけで人に良い影響を及ぼす」という人もいるが、人なんて時間がたてば成長していくものだと思っていた。つまり、私は私を他人事に捉えていたのだ。

その考えが変わり始めた時期ははっきりしている。小学４年生だ。国語では音読をする授業が増えていった。音読の良さを感じられていなかった私は、増えたことにプラスの気持ちなんて持てなかった。先生はその気持ちに気づいたのか、全員参加ではなく、任意参加の音読に変えてくれた。私はそれに参加するという発想は出てこなかった。誰かがやってくれると思っていた。そんな中、任意参加でも挙手をして参加する子はいて、とても楽しそうで少し羨ましかった。そこで疑問が浮かんだ。何で楽しいのだろう。どこに趣があるのだろう。その答えを追い求めていた時、気づき始めた。参加している子は私と違って面白く少しふざけて読んでいて、聞いている私たちをいつのまにか笑わせてくれていた。でもどこかまだ不思議だった。笑わせている本人も楽しそうだったのだ。なぜ楽しいのだろうと不思議に思った私は、その理由を探すためにも音読をやってみようと思い、挙手を試みた。最初は緊張もしていたから、何の抑揚もつけず淡々と読んでいた。自分が読んでいることは少しクラスに申し訳なく感じていた。聞いていたクラスの反応もいつもと違って静かだった。これは私が探し求めていたものではないと気づいた私は勇気を出して、いつも読んでいる子のように少しふざけて読んでみた。すると、クラスのみんなはいつものように笑ってくれた。みんなの本心は分からなかったが、私の読み方に反応して笑ってくれたのは本当に嬉しかった。良いクラスだなと改めて感じた。でもそれより自分が楽しくて、嬉しくて仕方がなかった。なんだか少し自信を持てた気がした。

それから、私はその笑ってくれるクラスによって音読するチャンスを多く欲しがるようになり、気づいたときには人前に出て何かをするのが好きになっていた。さらには、誰かを笑わせたい、楽しませてあげたい、喜ばせたいという欲望を持つようになっていた。つまり、人の喜び

が自分の喜びと捉えられるようになっていたということだ。少し前までは自分の事すら他人事として捉えていた私は、そのクラスでの過ごした時間で、他人の事を自分事として捉えられるようになっていたのだ。それと同時に、私は人が人に助けられ成長していることを知った。大げさに言えば、人と人との交流、またそれによって生み出す環境がある一人の新たな進化を遂げていることを知ったのだ。

それから環境によって人を変えられることを知った私は、私も誰かを変えて救いたいと思うようになり、自ら手を挙げて進んで何かをする事に躊躇がなくなった。さらには、好きになっていた。その経験は今の自分にも繋がっていて、今では生徒会選挙や学年委員会などのリーダーにも挑戦する人へと成長することができた。私に良い影響を与えてくれた小学４年生のクラスには感謝しかない。

与えられる影響は全て良い影響とは限らないし、自分が良いと思っていても相手が悪いと感じる影響を与えてしまうこともあると思うが、それを恐れずにこれから私はもっと人に良い影響や人を変えられるきっかけを作れるように、私自身が臆せずに地域のボランティアや学校行事などの多くの機会に挑戦していきたいと思う。